【連携と協働の事例】サンゴ礁

# 海域公園のサンゴを守る地域ぐるみの活動

竹ヶ島海中公園のエダミドリイシサンゴを守る会（徳島県海陽町）
海陽町観光協会　藤田奈都季（元・地域おこし協力隊員）

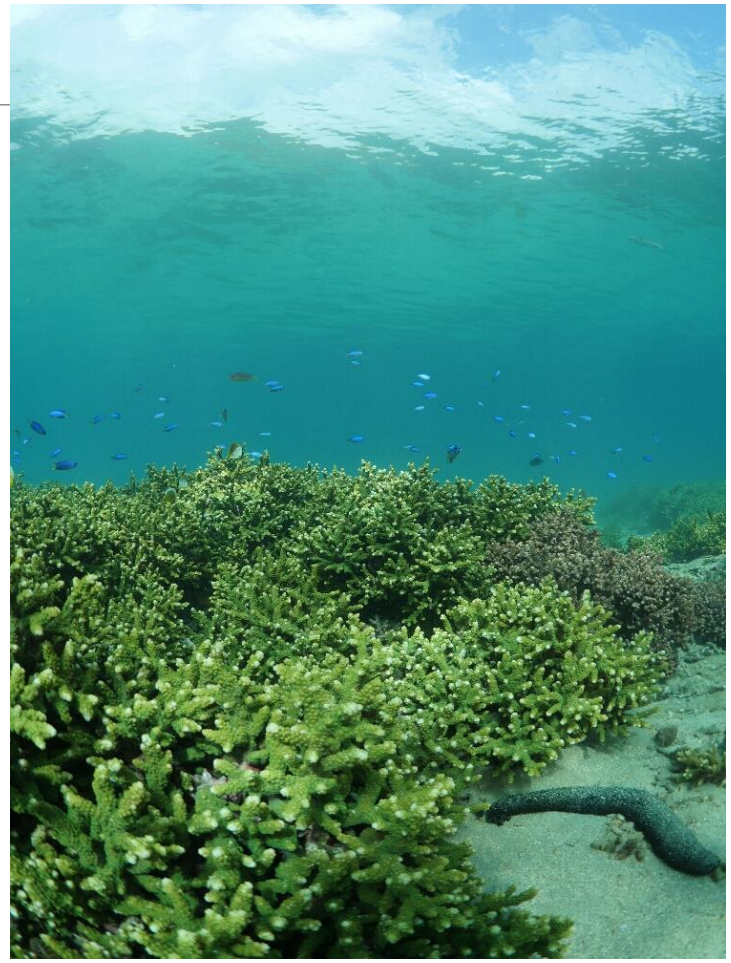
# 1.地域の概要

高松
坂出
丸亀
善通寺
三豊
観音寺
香川県
東かがわ
矢筈山
鳴門
阿波
徳島
三好
小松島
四国中央
徳島県
阿南
雲早山
剣山
太竜寺
工石山
吉野川
那賀川
高知県
工石山
香美
高知
香南
土佐
安芸
土佐湾
室戸阿南海岸国定公園

四方原
芝
298
海陽町役場
櫛川
野江
高園
海部
55
鈴ケ峰
中山
日比原
宍喰
尾崎
55
甲浦
宍喰浦
甲浦
竹ケ島
竹ヶ島
(C)Mapbox (C)OpenStreet

# 竹ヶ島について

- 室戸阿南海岸国定公園内
- 南北1km、東西700m、周囲4km
- 100mの橋でつながる有人島
  （約61世帯、人口約139名　R3.1.31現在）
- 島の北西部2ヵ所が海域公園に指定
- エダミドリイシの群生の北限



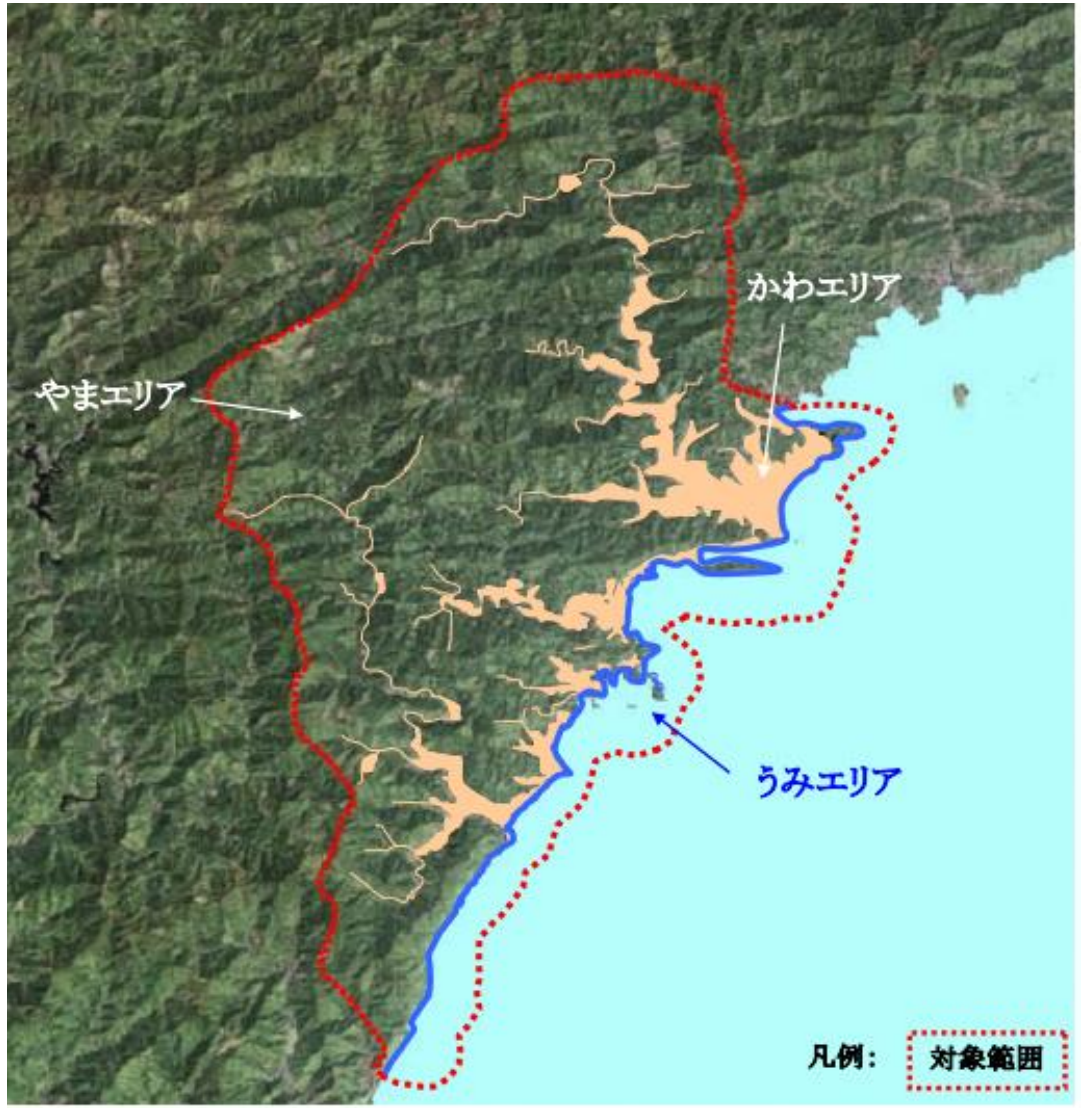
竹ヶ島海域公園一号地内に群生するエダミドリイシ

# 竹ヶ島のサンゴと保全活動の流れ

- 1972年：海中公園に指定。
- 1981年～：異常低水温、海水の濁りなどにより、エダミドリイシサンゴ、シコロサンゴが斃死。内湾性のカワラサンゴなどに遷移。
- 1986年～：JF宍喰青年部、のちにNPOを設立する有志ダイバー、旧宍喰町が、エダミドリイシサンゴの保全活動、移植を開始。
- 2004年：NPO法人あど未来設立＝里山・里川・里海のあるまちづくり。
- 2005年：竹ヶ島海域公園自然再生協議会（環境省）が発足。保全活動は地域ぐるみのものに。
- 2016年：本活動組織（水産多面的機能発揮対策）の設立。

# 竹ヶ島海域公園自然再生協議会

- 海陽町～高知県東洋町。海域公園を囲む周辺海域＋3河川の流域。
- 構成：行政、学識者、漁協、NPO、任意団体、住民、民間企業など多様。
- 事務局：海陽町役場商工観光課。
- 「うみ分科会」　「やま・かわ分科会」それぞれ独自に予算を獲得して活動。「うみ分科会」（会長：JF宍喰組合長）は現在、おもに水産多面の事業を活用。
- 総会（年1回）、分科会の検討会（年2回）で、成果と課題の共有・計画の見直しなど。

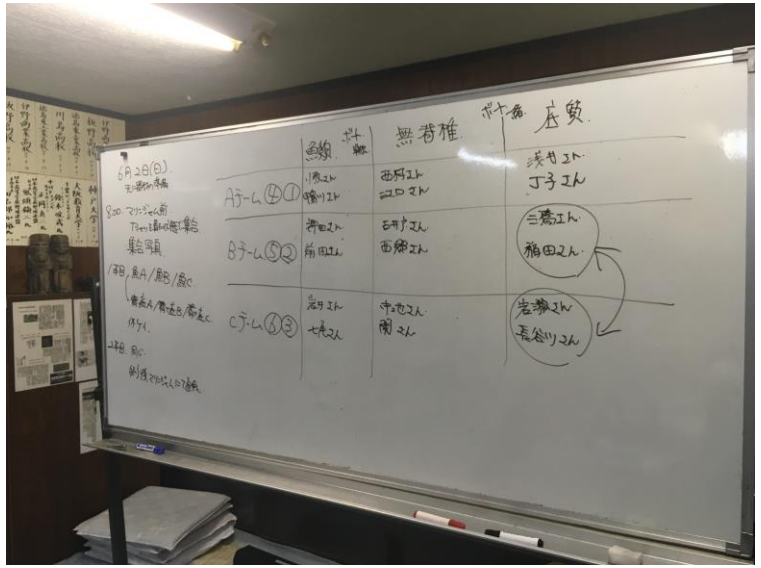


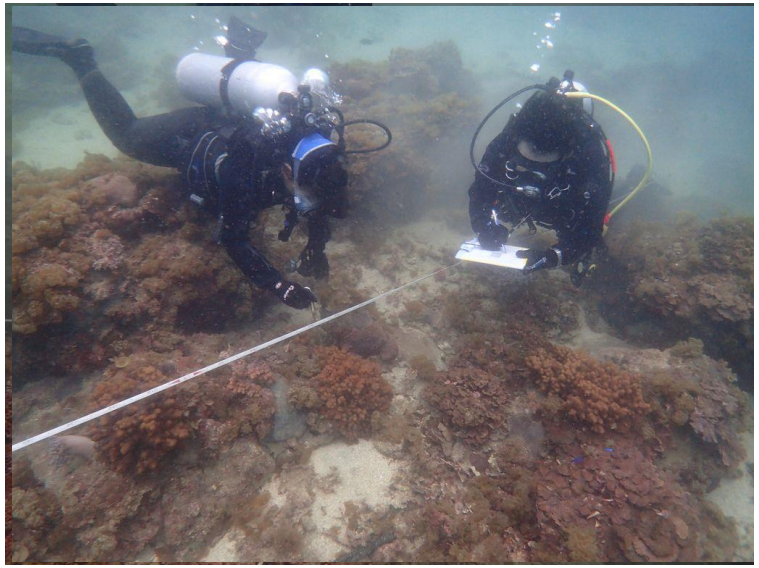
# 2.活動の概要

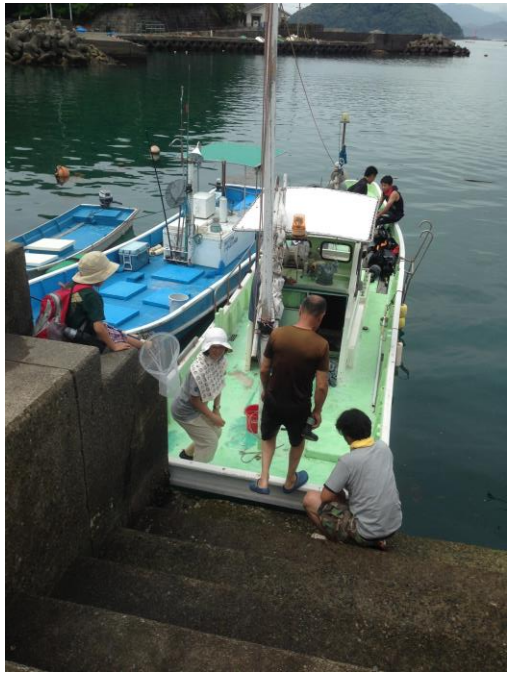
# 活動その1：サンゴ礁の保全

- 例年、5月の第3週の2日間に実施。
- リーフチェック
  世界共通の手法（ライントランセクト法）を用い、サンゴの健全度を測るモニタリング調査。
  竹ヶ島では2006年～年1回実施。
- 海岸の清掃。
- 潜水による海中・海底の清掃。
- オニヒトデの駆除（発生しているかどうか確認）。

資料提供：四国海と生き物研究室　岩瀬文人氏
ニタコンサルタント株式会社







リーフチェックではボランティアダイバーの参加によって活動が助けられています。
こちらの活動は竹ケ島自然再生協議会の協力事業として活動を行っています。

資料提供：四国海と生き物研究室　岩瀬文人氏
ニタコンサルタント株式会社

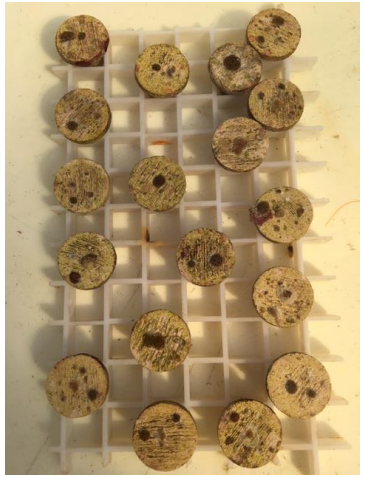
# 活動その2：宍喰小学校5年生の学習

- 11月～12月に実施。
- 1日目：座学
  - ・サンゴの生態、竹ヶ島のサンゴの特徴、保全活動などの講義。
- 2日目：体験学習
  - ・サンゴの種苗を、海底から採取した石に接着する体験。
  - ・漁業者が素潜りでサンゴの苗を植える様子を海中展望船で見学。

水中ボンドを用いて
サンゴを岩の隙間に
移植しています。

移植したサンゴを
手にして潜水する
地元漁業者

小学生の
生活発表会

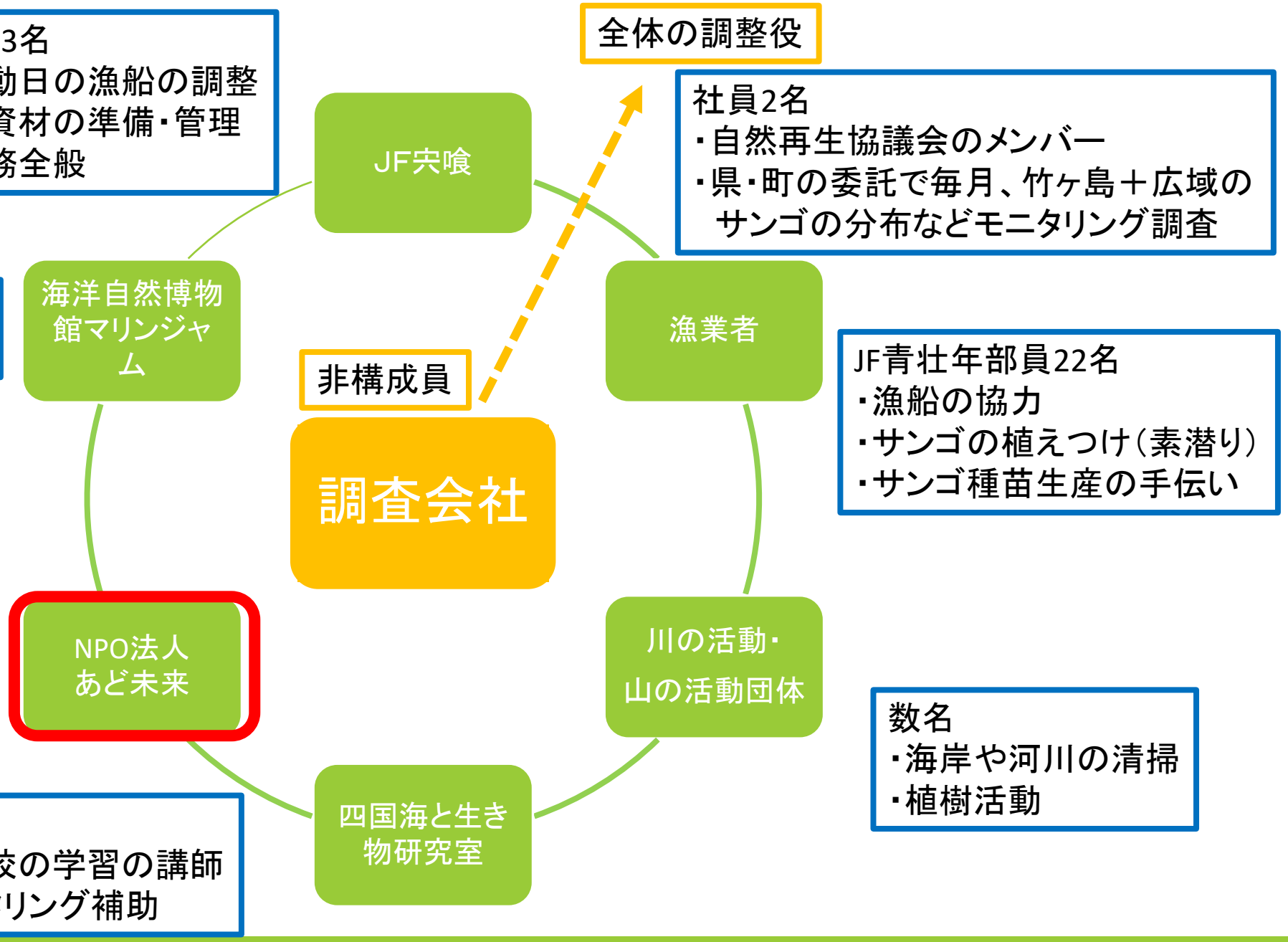


アクアリウム水槽で用いられ
ているセラミックの板に付着する稚サンゴ

サンゴの移植方法につい
ても毎年研究しています。

# 3.連携の体制

# 構成員・役割


職員3名
・活動日の漁船の調整
・器資材の準備・管理
・事務全般
JF宍喰
全体の調整役
社員2名
・自然再生協議会のメンバー
・県・町の委託で毎月、竹ヶ島＋広域のサンゴの分布などモニタリング調査
職員5名＋地域おこし協力隊
・サンゴの生殖研究と種苗生産
海洋自然博物館マリンジャム
漁業者
非構成員
JF青壮年部員22名
・漁船の協力
・サンゴの植えつけ（素潜り）
・サンゴ種苗生産の手伝い
調査会社
会員のうち10名
・リーフチェックの運営
・海岸と海中清掃の運営
NPO法人あど未来
川の活動・山の活動団体
数名
・海岸や河川の清掃
・植樹活動
四国海と生き物研究室
1名
・小学校の学習の講師
・モニタリング補助

# NPOの成り立ちと活動

- 1978年、石川侃（つよし）氏（NPO設立者）が大阪から移住。漁業＋民宿・カフェ経営のち、1988年にダイビングショップを開業。
- 1986年、JF青年部員2名＋石川氏、サンゴ移植を先進地から学ぶ。翌年から町主催の「サンゴ移植会」。
- 2004年、NPO法人あど未来設立。自然再生協議会の発足に先立ち、県から石川氏への提案がきっかけ。
- 2006年～、NPOのおもな活動は、年1回のリーフチェック。全国からボランティアダイバーを募集して実施。
- 2016年～、6月の2日間の活動日は、NPOが運営全般を担う。

# 4.課題と
# 取り組みたいこと

# ここでちょっと自己紹介

- 神奈川県茅ケ崎市出身。

子どものころ、土日は海や山ですごす。

- 大学院で海洋生物の専攻。大学時代の部活動はカヤック。

  →自然と触れ合い、四国の田舎暮らしに興味をもつ。

- 地域社会と海の関わりに興味。
  → 海陽町の地域おこし協力隊に応募。

- 竹ケ島の魅力を発見するため、町内のサンゴの保全をはじめとする海に関する活動にかかわる。

- 20年10月から海陽町観光協会に。

  最近は、近隣の砂浜のビーチコーミングに行っては、町内の貝類の種類の豊富さにいまだに驚かされています。

# みんなが課題だと考えていること

## ◆課題

- サンゴ保全活動の担い手の高齢化。
  サンゴの移植を始めたJF青年部の漁師さんは現在75歳前後に。

主体の後継者も50歳前後になり、20～30代の後継者が非常に少ない。
NPOのメンバーも60歳代が中心。

## ◆今、検討されている対策

- 現在、活動にかかわっている人たちも活動組織の構成員として迎え入れる。

→横との繋がりを強化！

→ わたしも、構成員になりました！

特に、20～30代の漁業後継者への期待と、本活動に興味がある人全てに参加してもらい、構成員になってくれるような形作りを検討。

# わたしが課題だと考え、行動したこと

## ◆課題

- ①2006年に宍喰町、海部町、海南町が合併。サンゴの保全活動は、竹ヶ島のある宍喰地区では活発だが、他地区では行われていない。
- ②地元の海を生かした学習などの一般観光客に向けた環境資源活用が実施されていない。

## ◆行動したこと

- ①宍喰小学校だけで行っている体験学習を、他校にも広げたら？

  町内の学校に呼びかけ　→　海部・海南に学区がまたがる海陽中学校が呼応　→　2019年に体験学習が実現！

  2020年はコロナウイルスによる休校で依頼もできなかったため、今後、継続してできるような形づくりを行いたい。

- ②地元の海を使いつつ、漁師さんが教える磯遊びを企画してみたらどうだろう？

  島内に暮らす漁師さんに協力を仰ぐ　→　漁師さんが先生となる磯遊びを実現

  参加者も多く、今後は体験観光コンテンツとして規模を拡大し、対象範囲を広げた形づくりができるように取り組んでいきたい。

# これから取り組みたいこと

◆海の環境保全をきっかけに、多くのひとをつなぎたい！！

➢漁師さんの思いを、世代や属性などを超え、広く伝えたい。

たとえば･･･サーファー。海陽町ではサーフィンも盛ん。

きれいな海陽町の海に対する想いは各々にあるはずではないか？

◆国内のどんなひとも海でつながれる町にしたい！！

➢海陽町は、町名に「海」。海の資源には、大きな可能性がある！
環境の保全とからめつつ、観光として呼び込める街づくりや、海陽町で水揚げされた水産物の商品開発や･･･････
いろいろなことにチャレンジしたい！！

ご清聴いただき、
ありがとう
ございました。

ご機会・ご質問がございましたら、是非ご連絡頂けましたら幸いです。

海陽町観光協会
☎0884-76-3050